

教育者とは―新島襄の生き方から考える

講師	井上 勝也 〔いのうえ・かつや〕
講師紹介	同志社大学名誉教授

教育者としての自分史

私は一九五四（昭和二十九）年、同志社大学文学部に入學し、二〇〇四（平成十六）年退職するまで五十年間、学生として、教員として同志社の歴史と共に歩んでまいりました。今日は私が小学校時代から「教育者とは如何にあるべきか」という大きな問題を考えてまいりましたが、現時点で到達した教育者の在り方についてお話ししたいと思います。

大分県教育委員会の教員採用試験にまつわる不正事件が連日マスコミで取り挙げられてきました。信頼すべき教師に対して生徒たちはどのような印象をもったでしょうか。生徒が教師に不信感を抱くと、教育活動が成り立たなくなることを私は第二次大戦中の小学校時代に体験しました。

教育は教師と生徒・学生の信頼が大前提ですが、同志社英学校の新島校長と生徒たちの間には信頼の太い絆がありました。今日のお話は新島襄の生き方を通して「教育者は如何にあるべきか」を考えることが目的ですが、その前に私の自分史を申しあげ、私が新島を教育者のモデルと考えるに至ったプロセスをお話してから本論に入りたいと思います。

私は一九三六（昭和十一）年の生まれです。敗戦時の一九四五年は当時国民学校と申しましたが、四年生でした。敗戦までの三年半の間、私は担任の先生や校長先生が毎日のように、お前たちは早く大きくなって兵隊さんになり、天皇陛下やお国のために戦地に行け、人間の命は羽毛のように軽いものだ、と繰り返し言うのを聞いていました。私たち純粋な小学生は先生の言葉を信じ、早く大きくなって兵隊さんになることを夢見ていました。戦争中に受けた作文の授業、当時は綴り方と申していましたが、この授業では自由作文ではなく、始めから男子生徒は将来軍人になり、女子生徒は従軍看護婦になることを前提にして作文するのです。また教師の言うことは絶対に正しいから親の言うことよりも教師の言うことを聞け、という教育を私達は素直に受け入れていました。しかし敗戦を境にして我が国の教育が一八〇度変わり、私は六年間に軍国主義教育と手探りの民主主義教育を実体験した世代です。

敗戦後の二学期の十月頃だったでしょうか。担任の先生は何の説明もしないで我々に「人間の命は地球より重い」と言い出しました。数ヵ月前まで「人間の命は羽毛のように軽い」と言っていた先生が、敗戦を境にして全く違ったことを言い出したのです。「青天の霹靂（へきれき）」という表現がありますが、小学校四年生の我々には大変大きなショックでした。現在の生徒ならすぐさま先生に「羽毛より軽い命がなぜ地球より重い命に変わるのですか」と質問するでしょう。しかし我々が戦争中に受けてきた教育はひたすら先生の言うことを黙って聞く、鵜呑みにすることを求められていましたので、先生に質問や反論をする生徒はいませんでした。しかし心の中では先生の変心ぶりに疑問を持つと共に、それまで一〇〇パーセント信頼していた先生に対して不信感を抱くようになりました。私の小学校四年生のこの体験が現在に至るまで六十年以上も「教育者とは如何にあるべきか」という根源的な問いを問いつける切っ掛けになりました。

私が将来教師になろうと考え始めたのは中学校時代です。「時代が変わっても全く違ったことを言うような教師にはならないぞ」と私は決意しました。戦後の民主主義教育の影響で、教師は生徒に真実を語るべきだ、そして教師は生徒自らが真実を見抜く力を培うような教育をすべきだと考えました。私は一九五四（昭和二十九）年、同志社大学文学部文化史学専攻に入學しました。それは敗戦まで私が受けた日本史の授業は神話が中心で、歴代の天皇が如何に慈悲深く民を治めたかといった皇国史観に貫かれていたのに対して、敗戦後に受けた日本史の授業では人民が歴史の主人公になり、歴史を創ってきたのだという歴史観で、これは面白い、私も歴史の主人公になれる、こんな歴史を大学で研究したいと考えるようになったからです。

私は将来中学校の歴史の教師になるにしても、その基礎に教育学をしっかり勉強しておかないといけないと思ひまして、三年次に教育学専攻に変わりました。私の関心は教育社会学や教育心理学よりも教育哲学の授業で「人間とは何か、教育とは何か、生徒とは何か」を研究し、「教育思想史」の授業では日本や西洋の偉大な教育者の生き方と教育思想を研究することに興味がありました。私の卒業論文も修士論文もスイスの教育者「J・H・ペスタロッチーの人と教育思想」であります。なぜペスタロッチーを卒論のテーマに選んだかと言いますと、ペスタロッチーは彼の言動と思想に一貫性があるからです。人間は言動に責任をもつべきだと考えていました私は、とりわけ生徒に影響をもつ教師にそれを強く求めたのです。第二次大戦中に人間の命は羽毛より軽いと言って優秀な若者たちを戦地に送り出した教師が戦後何の自己批判もしないで平和主義者の顔をして教壇に立っていることを苦々しく思っていた私には、思想と行動の一致は重要な教師評価の規準になっていたからです。

私は大学院博士後期課程の一年目に助手に採用され、いよいよ同志社大学での教員生活が始まりました。一九六九・七〇（昭和四十四・四十五）年以降、数年にわたって日本中というより世界中で大学紛争が起こりました。我が同志社大学も学生のバリケード封鎖で授業が数ヵ月ストップしました。その間ラディカルな学生たちと教員集団が大眾団交をし、夜中の二時、三時までやったことがあります。一九六〇年代の高度経済成長の激変を受けた当時の学生たちは国や大学に、そして我々教員に鋭い批判の言葉を浴びせました。例えば、私が胸に短刀を突き刺されたように思った言葉にこういうのがあります。「我々はお前たちの命をかけたような授業を聴きたいのだ。我々の魂を揺さ振るような授業をせよ。毎日同じノートを使い、マンネリの授業をするな!」、「教師たるものは学生に向かって誠心誠意全力投球しろ!」と言うのです。当時の授業はマスポロで、マイクを使った大教室の授業が多く、教師と学生の間に大きな溝ができていました。学生は血の通った、温かみのある授業を求めているのです。私はまだ三十歳代前半の駆け出しの教師でしたので、学生さんの主張はもっともだ、そのとおりだと思ひました。これらのラディカルな発言によって私は自分の授業を反省し、教師の在り方を根本的に問い直す機会になりました。

私は今後も同志社大学の学生さんたちに教えられる限り、自分の立脚点を明確にし、知識の切り売りではなく、学生の心に訴えかけ、触発するような授業を心がけるべきであると考えようになりました。私の立脚点は私の母校であり、職場でもある同志社大学であります。そこで私は同志社大学の創立者新島襄の建学の理念を研究し始めました。私は当時「西洋教育思想史」という科目を担当していましたが、授業で取り上げるギリシャ時代から近代に至るトータルな人間の形成、プロフェッショナルを育成する前に、知・徳・体の調和のとれた主体的な人間の形成、いわゆる全人教育の歴史をたどっていたのですが、新島襄は何とそのような全人教育を理想とするアメリカのアーモスト・カレッジ（Amherst College）で三年間学び、一八七四（明治七）年帰国後、同志社英学校を創設して、木を見て森も見ることのできる人間、自分の良識を磨き、良心に従って主体的に生き、共同体の一員として地方や国家のリーダーを引き受け、時には自己犠牲を厭（いと）わない人間、そして自分が神様に愛され、赦（ゆる）され、生かされている小さな存在であることを自覚した人間、このような自立した人間をこの同志社で育成しようとしたことを知りました。

私は、私と同じ教育観をもつ自分の母校の創立者であり、かつ学問の大先輩として、近代国家の形成期である明治期に京都の地で、仏教や神道の勢力から妨害を受けながら、そして天皇制絶対主義国家体勢を固めようとする政府の方針と衝突しつつ、万難を排して突き進む新島襄という人物の生き方と彼の思想に興味をもち始めました。

私は一八七七（昭和五十二）年から一年間新島の母校マサチューセッツ州にありますアーモスト・カレッジに留学し、新島の足跡を追い求め、彼の学んだキャンパスや教室やチャペルで――〇年前の新島を思い起こし、彼の時代のカリキュラムを調べる間に、今度は新島の方から私に近づいてくるような気持ちになりました。私は新島に魅せられ、彼の生き方、思想とりわけ教育者としての新島を本格的に調べ始めて、今日まで三十年以上になります。新島はこんなに湧き出す泉のように汲めども尽きぬ魅力をもった人物です。今日は彼の生き方から「教育者とは如何にあるべきか」を考えてみたいと思います。序論が長くなりましたが、いよいよ本論にのります。

新島襄に影響を与えた二人の人物

新島は満二十一歳の一八六四（元治元）年、函館から密航を企て、アメリカに渡り、ニューイングランドで中等・高等教育と専門教育としての神学教育を受け、ピューリタンの人たちの共同体で八年間生活し、一年余を岩倉使節団の随員としてアメリカを始めヨーロッパ八カ国の教育視察と調査をおこないました。彼が日本に一八七四（明治七）年、十年ぶりに帰国しました時には三十一歳になっていました。従って彼の人間観や教育観、キリスト教観の形成は主に南北戦争後のニューイングランドでおこなわれたということが出来ます。それではたど今から新島がニューイングランドに滞在中最も大きな影響・感化を受けた二人の人物をご紹介します。一人は彼の滞在中はもとより帰国後も親以上に親身になって彼の成長を見守ってくれたハーディー（Alpheus Hardy, 1815-87）です。ハーディーは新島にとって最大の恩人であり、彼のために生活費はもとより学費も全て出してくれましたし、彼の帰国後はアメリカン・ボード（宣教師をキリスト教が宣教されていない地域に派遣する団体）の最高責任者の立場から同志社英学校に多額の財政的援助をしてくれた人です。

さて、ハーディーは青年時代に将来牧師になって神様の喜ばれるような生き方をしたいと考えていましたが、フィリップス・アカデミーに在学中大病をして中退せざるをえなくなりました。即ち牧師への道を断たれた訳です。彼は煩悶しました。やっと到達した結論は、自分は直接神に仕えることはできなくなったが、貿易に従事して得たお金を神の喜ばれるような目的に使うならば間接的に神に仕えることになるということです。ハーディーはボストンで船会社を興こし、南北戦争中は十七隻の貿易船を世界の海に走らせていました。彼は共和党から推薦を受け、マサチューセッツ州の上院議員に選ばれています。そして先程申しましたアメリカン・ボードの運営委員会議長にもなります。ハーディーは一八六五年極東からやって来た新島の志―即ちキリスト教を学びたい、近代科学を学んで日本の近代化のリーダーになりたいという大きな志を実現するために、当時ニューイングランドで名門校であったフィリップス・アカデミーやアーモスト・カレッジやアンドーヴァー神学校で新島が学べるようお膳立てをしてくれました。新島はハーディーの生き方やパーソナリティーから多大の感化を受けています。一八八七（明治二十）年、ハーディーが七十二歳で亡くなりますが、新島は同年十一月同志社チャペルでハーディーの追悼礼拝をおこない、ハーディーの人柄を次のように整理しています。

- 第一 好て聖書ヲ読ミ祈禱ヲ常ニセシ事
- 第二 コンモンセンス判断力ニ富ミ、見キリカヨク時機ヲ誤ラサル事
- 第三 不怠智識ヲ養成セシ事、友ヲ長者ニ求メシ事
- 第四 勉強シテ其ノ職業ニ怠ラサル事
- 第五 注意力ノ盛ナリシ事
- 第六 人情ニ晩通シ人ヲ見分タル事

- 第七 活眼ヲ以テ古今ノ歴史ヲ看破シ実施上ノ助ケトナサシメシ事
第八 当時ノ事情ヲ明力ニシテ将来ヲ推測セシ事
第九 無益ニ金銭ト時間ヲ費サヘル事
第十 非常ノ働キヲ為サン為ニ非常ニ休息シ、又美術ヲ愛シテ己レノ鑄ヲ養ヒシ事
第十一 事タニ少シモ油断ノナキ事 ①

以上のように新島は一八六五年以来二十二年間にわたってアメリカの父として、そしてピューリタンのモデルとして尊敬してきたハーディーのパーソナリティーを極めてコンパクトにまとめた。ハーディーのパーソナリティーが新島のパーソナリティーの形成に影響を及ぼしたことは想像に難くありません。

次にシーリー（J.H. Seeley, 1824-95）教授を取り上げます。シーリーは新島がアーモスト・カレッジ在学中の三年間、彼のアドヴァイザーのような役を果たした教授で、スケールの大きな、またカリスマ的な（多くの人々を心酔させるような）教授です。新島はリューマチの持病をもっており、真冬は平均マイナス十度にもなりますニューイングランドでリューマチに苦しみますが、シーリーは寮では十分治療が受けられないということで、大学のキャンパスにあるシーリー教授の自宅に新島を引き取り、奥さんともども温かい看護をしてくれました。シーリーは一八四九年アーモスト・カレッジを卒業しました。皆さんご存知の一八七六（明治九）年札幌農学校にやってきたクラーク博士（W. S. Clark, 1826-86）はシーリーの一年先輩になります。シーリーはドイツのハレ大学に留学し、神学と哲学を研究し、帰国後牧師をしていましたが、母校に招かれ、一八五八年から道徳哲学の教授として、そして一八七七年から学長となり、九〇年まで勤めました。彼は一八七二（明治五）年インドへの講演旅行の途中日本に立ち寄り、東京で新島の父民治に会って息子の消息を伝えていました。お父さんの喜びはいうまでもありません。彼はまた一八七四年に連邦議会の下院議員になりました。私は先程シーリー教授をカリスマ的と申しましたが、その証拠の一つ挙げますと、皆さん、日本の無教会のキリスト教指導者であった内村鑑三（1861-1930）という人の名前を聞いたことがあるでしょう。彼は足尾鉾毒反対運動にかかわり、自宅で聖書講話会を開いて強い影響力をもった宗教家ですが、彼は新島の幹旋で一八八五年から八七年までシーリーの学長時代にアーモスト・カレッジに留学してシーリーから強烈な感化を受けているのです。この内村が『余は如何にして基督教徒となりし乎』という本の中で次のように申しています。

「総長先生彼自身にまさせて余を感化させたものはなかった。彼がチャペルで起立し、讃美歌を指示し、聖書を朗読し、そして祈ることで十分であった。余は尊敬すべき人を目見るというただ一つの目的のためにも、けっして余のチャペル礼拝を『カットした』（すなわち欠席した）ことはなかった。」②

さて、新島はシーリー教授をどのように捉えているかといえますと、シーリーの講演集“The Way, the Truth and the Life”を『宗教要論』と題して、同志社英学校の卒業生小崎弘道が翻訳して出版するに当って、新島は序文を寄せシーリーを次のように紹介しています。

「夫（ソ）ノシーレー氏先生は目今米国屈指ノ鴻（コウ）学士ニシテ、其芸達シ、政事学、経済学、理学、神学等ハ其尤モ長スル所トス、曾（カッ）テ聘セラレテ馬州アモルスト邑（ムラ）ノ「アモルスト」大学ノ教員トナリシニ、居ル数年間、一生徒ノ先生ニ向ツテ片言隻語ノ不平ヲ鳴ラセシ者ナク、且先生ノ名望ヲ慕ヒ、千里ヲ遠シトセスシテ笈（キュウ）ヲ此校ニ負ヒ、其薫陶ヲ望ム者陸續（キビス）ヲ接シタリ、嗚呼（アア）先生ノ如キハ壺（タダ）ニ学識ニ富ミ教育ノ術ニ達セルノミナラス、其徳望ノ高クシテ其品行ノ正シキ、其容貌ノ偉ニシテ其言論ノ簡ナル、一見人ヲシテ其風ヲ仰キ、其人トナリテ其謙遜シテ惜カザラシム、豈（アニ）希代ノ碩学（セキガク）ト謂ハザルベケンヤ（中略）予ノ米国ニ遊学セシヤ親シク先生ノ教誨ヲ受ケ、屢（シバシバ）食卓ニ侍リ、遊歩ニ随ヒ、家族同一視ノ眷（ケンコ）顧ヲ蒙（コウム）リタレバ、此訳書ヲ閲読スルニ当リ懐旧感恩ノ情已（ヤ）ム能ハザル者アルナリ。」③

新島がニューイングランドで出会った多くの人々の中で、とりわけ彼のパーソナリティーや思想の形成に決定的に大きな影響・感化を及ぼしたハーディーとシーリー教授をご紹介しましたが、新島の帰国後彼が一八九〇（明治二十三）年亡くなるまでの十五年間の教育活動、人間として、キリスト者として、牧師として、教育者としての生き方のモデルはこのハーディーやシーリーであったといえます。

教育者・新島襄の生き方

いよいよ教育者新島襄の生き方を通して、「教育者とは如何にあるべきか」を考えてみたいと思います。最初に取り上げますのは英学校創立の翌年即ち一八七六（明治九）年の秋に大学編入学してきた熊本洋学校の出身者たち（熊本バンドといえます）が、創立まもない同志社英学校に不満を抱きました。その理由はまだ学校として体裁が整っていないこと、在学生の学力が低いこと、彼らが期待するほど高度な学問を新島や他の宣教師たちから学ぶことができないことでした。彼らの教師であったジェーンズ（L. L. Janes, 1837-1909）のアドヴァイスもあって彼らの不満をリストアップして、新島校長に提出しました。彼らが驚いたことには新島は彼らの改善要求を真摯に受けとめ、さっそう改善に着手しました。このエピソードから生徒の要求に誠実な新島校長の一面を見る思いがします。教育者新島襄の真面目は一八八〇（明治十三）年四月の自責の杖事件です。学校側が上級組と四ヵ月遅れて入学した下級組のクラスを合併することを決めたことから上級組が不満の表現として集団で無断欠席をしました。この実行行使をする前に上級組は新島校長に「御何書」を提出し、なぜ学校側は生徒たちに十分な説明をせず、我々の言い分を聞かないで合併を決定するのかと詰めよっています。長幼の序の厳しかった当時、教師会の決定は慎重さを欠き、青年心理を無視した行為でありました。「憫憫不羈（テキトウフキ）なる書生」即ち才気が優れ、独立心が旺盛で条規では律し難い生徒を庄束しない新島校長は四月十三日の朝の礼拝に際し、持参した杖で自らの手の平を打って校長たる自分を処罰しました。彼は生徒のストライキを校則違反という言葉で処罰するのではなく、まず生徒の立場に立って考え、自らの指導の不十分さを深く反省し、校長としての責任を痛感しました。新島は一八八三（明治十六）年五月、東京でおこなわれました日本キリスト教徒大親睦会でイエスが弟子たちの足を洗ったことを主題とする説教をしましたが、彼は次のように申しています。

「基督ハ学者道徳家ト異ナリ、之ヲ為セト自ラ其手本ヲ出シテ教ヘ賜フ、人間間ノ教師ハ実ニ美語善言ヲ吐キ他人ニ教ユルモ、自ラ之ヲ為シテ教ヘス。」④

イエスの生き方をモデルとして生きる新島はストライキをした生徒たちに校長としての責任の取り方を示すと共に、校則の遵守を態度で示したといえます。

新島は一八七五（明治八）年、同志社英学校の創設時から大変な苦勞の連続でした。キリスト教主義の学校を仏教勢力の強い京都の地に造ろうとしたこと、キリスト教を学校で教えるはならないという京都府からの指令、宣教師たちの不満、大学設立運動、明治政府のキリスト教に対する厳しい方針、彼の持病である頭痛、不眠症、眼病、リューマチなど、いわゆる八方塞がりのなかで健康を書し、一八八四（明治十七）年四月から静養と大学設立の募金を兼ねて欧米に旅立ちました。翌年五月、十一年ぶりにニューイングランドで旧友と再会し、大学設立の募金運動のなか、同志社英学校の卒業生である蔵原惟郭（コレヒロ）がアメリカの神学校に入学することを希望しながら果たせず、アルバイトをして入学の機会を持っていることを知り、新島は次のような激励の手紙を書き送っています。一寸長いですが読んでみます。

「華墨（カボク）拝読仕候、陳者（ノブレバ）小弟も御存之通兎角多病、クレフトン・スプリングより帰坡（キハ）仕候より、尚氣候之宜しからざるより一ト先南方ニ出懸殆一ヶ月余所々遊歴經過し、幾分か先途之目算なし参り、エール大学ニモ逗留ポルタ先生二面会仕候処、彼エール神学校ニハ大学科コレジコースを卒ヘサルニアラサレハ入校ヲ許サス、又扶助も与エス、右故該校入学之希望は御絶可被成候。小弟別ニ計ル処あり、バンゴワ「バンゴワハメイン州ニアリ、曾（カッ）テポンド氏ノ授業セラレシ神学校ナリ」カ又ハシカゴ之神学校ニハ特別課あり、是より此課ニ入ルの策をなすべし。此両策中一ツハ成ルヘシト希図仕居候。当時御労働中基（ハナハダ）ツラキこともあるべし。然シ古来大事業を為せし人物中大名力黄金家に生れし者甚稀ナリ。労働ハ人生之良業ナリ、苦難ハ青年之業を成スノ階梯ナリ。小弟昔時労働セシ事一年ヨ、又人之糞汁迄モ洗ヒシ事アリ。是等之事ハ今日ニトリ小弟ヲ益スル殊ニ甚ダシ、愛兄ヨ忍ブベシ、忍ブベシ、疲勞克兄ヲシテ眠ラシムベシ。人勞シテ初メテ黄金ノ貴キヲ知ル、日本ノ乳臭書生多クハ金の貴キヲ知ラス、乞ヒササレハ事容易ニ成ルヘシト思ハラルニハ甚困候。兄ヨ忍ブベシ、落胆スル勿（ナカ）レ、労働ハ兄ノ本国ヲ発スル時ノ覚悟ニアラスヤ。坐シテ人ノ助ケヲ受クルヨリモ勞シテ自ラヲ助クノ貴キニ如カス。人生事ヲ為スヤ只々学問ノ博キニヨラス、一片不撓ノ鉄腸ヲ磨練スルニアリ。兄ヨ此理ヲ知り賜フヤ否。小弟滞米中再ヒモデー氏二面会スルノ機ヲ得ハ兄ノ為ニ計ル処アルベシ。真実誠忠勉勵等ヲ以テ宜シク兄ノ実働ヲ顕スベシ。米州人物乏キニアラス。何人カ克兄ヲ知ルモノアラン。勉ヨヤ、忍ヘヨヤ、小弟兄ノ為ニ祈テ怠ラサルベシ、不宣。」⑤

蔵原はアンドーヴァー神学校で学び、後年衆議院議員になりますが、新島が自分は二十年前キャンボーイとして船長の肌着を洗ったことが人間的成長にプラスになったことや、「人生事ヲ為スヤ只々学問ノ博キニヨラス、一片不撓ノ鉄腸ヲ磨練スルニアリ」と説いて、業を成すには知識の多さではなく、不撓不屈の強靱な精神と実行力であると諄々（じゅんじゅん）と自分の人生観を述べて彼を励ましています。これは卒業生を極みまで愛する教育者新島の面目躍如とした手紙であります。校長新島は自分の欧米旅行中に生徒が放校処分を受けたことを知り、妻八重に次のような手紙を書き送っています。

「五年生之林拾氏、緒方正脩氏ハ教会よりも放逐せられ候哉、此兩人之取扱ハ如何相成候哉、尚教会に加はり居候は、何卒先非を悔改め、再び謝状を出し入校の手ツルハ付キ不申候哉、市原君教会員ニ御相談有之度候。成丈此ツツミキヲ以テ此二人を容易に捨てざる様仕度候。私も林氏とは特に懇意になし居り候ゆえ、同氏の為ニ涙ヲそゝき、又度々祈り居申候。又アトノ五六人連中ハ全く逐校せられ帰校の望ハ無之候や、残念ニ存候。」⑥

一八八五（明治十八）年十二月、一年八ヵ月ぶりに帰国した新島は英学校の創立十周年の記念式典で次のような演説をしています。

「諸君ト共ニ今往事ヲ追想シテ祈念シタキハ、昨年我不在中同志社ヲ放逐セラレタリシ人々ノ事ナリ、真ニ彼等ノ為メニ涙ヲ流サザルヲ得ズ、彼等ハ或ハ真道ヲ聞き真ノ学問ヲナセシ人々ナレトモ、遂ニ放逐セラルゝ事ヲナシタリ。諸君ヨ一人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ、往事ハ已ニ去レリ之ヲ如何トモスル事能ハズ、以后ハ我情実ニ謹ム可シ。」⑦

新島は教育空間を教室や学校に限定せず、彼はよく生徒を自宅に招き、食事を共にしています。

「書生が遊びに参り候は、何卒丁寧ニ御取扱被下、成丈御馳走もなし被下度候、彼等ハ実ニ大切之人物ニ候間大切ニ取扱申度候。」⑧

一八八八（明治二十一年）年に卒業した湯浅一郎は新島宅に招かれた様子を次のように述べています。

「新島先生の家には、帰省する時、又は正月には呼ばれて、西洋料理を馳走になったが、キャベージマキ、オムレツ、ピフテキ等の様な、今日では余り結構でないものを悦んで食べた。チーズは不味いものだと思って食べ無かったら、是は西洋料理を食べる時は必ず食べなければならぬものだ」と先生から云はれた。」⑨

新島はジェントルマン教育としてナイフやフォークの使い方まで教えたのだと思います。後年牧師になった吉田清太郎は新島の思い出を次のように語っています。

「新島先生は私共の級には、聖書の研究と米国史をもって居られたが、級中一番出来ないと思ふ様な人を非常に大事二せられた。先生の御宅へ行ったりするといふ御話をせられ、帰へる時には玄関から門の処迄二十間位もある処を出る迄と見送って居られる。」⑩

明治十三年の自責の杖事件の首謀者であった徳富猪一郎、後の蘇峰は新島のアドヴァイスを振り切り、卒業目前にして退学して上京しましたが、彼は九十四年の生涯、常に新島のよき弟子であり続けようとしてました。彼は英学校時代の新島校長を次のように回想しています。

「筆者は毎日此の朝礼に出席することを大なる楽しみとした。それは近くに新島其人を見ることが出来たからである。新島の朝五十分間の訓話や、学生心得書の朗読は、兎に角も、新島其人を見ることが予に取っては一種の感激即ちインスピレーションであった。新島は別に豪傑振らず、学者振らず、仙人でもなければ、聖者でもなく、ただ一個の平凡なる普通人であるが、然も彼の風格は、そくそくとして人を動かすものがあつた。筆者は彼の風格に接する毎に、人間としては斯ある可きものである。斯あらねばならぬものであると考へ、常に今も猶其の印象が鮮（アザ）やかに我が胸間に生きて居る様な心地がする。」⑪

以上のような卒業生の新島についての思い出から、クラスで一番できの悪い生徒を配慮し、生徒一人ひとりを大切に、自分の息子のように愛する教育者像が浮かび上がってきます。彼の行動は一匹の迷える小羊を追ひ求める牧者（ルカによる福音書）や、放蕩息子のことを日夜思い、帰ってきた息子に大喜ぶる父親（ルカによる福音書）のイメージとオーバーラップします。

新島は福沢諭吉のように書物を遺（ノコ）しませんでした。しかし我々は現在『新島襄全集』全十巻をもっています。彼は最晩年モルヒネの注射で痛みを押さえながら、二メートルにも及ぶ長い手紙を卒業生に書き送っています。彼は亡くなります二十五日前、当時最上級生で将来を嘱望していました横田安止（ヤスタダ）に次のような手紙を送っています。

「同志社之近情ハ如何、『よしの山花咲く此の朝な』心にかゝる蜂のしら雲』古人の歌に詠せし如く、小生之心ハ日夜諸君を忘るゝ能ハす、何事を聞く二付け而も今ハ諸君ハ如何あらんと心配いたし居候。

学校も漸々流レ行ハ、生徒の数も増したるより自然之勢ニして止む能ハさる所も可有之候得共、小生平素之目的八成丈法を三章二約シ、我力校をして深山大沢之如くになし、小魚も生育せしめ、大魚も自在ニ发育せしめ、小魚大魚各其分に應じ、其身を世に犠牲となし、此美ハしき日本を早晚改良して主之御国、即チ黄金時代に至らしめん事ハ小生之日夜熱祈して止まさる所なり。貴君之同級生之中、将来望ある者とハ充分御交リ被成、又充分ニ心術之修行を為し、百折不撓之精神を養ひ、大胆不敵之元氣を蓄へ、他日中原二雄飛するの準備を為されん様貴々も御勤め被下度候。又校中都花人士之子弟二して元氣なきものも、御見捨なく御立被下候事ハ、敗鼓之皮迄も捨テサル国手ノ尤注意〔ス〕ヘキ所也。」⑫

新島は横田に自分の教育観を吐露し、後輩の指導よろしきを依頼しています。まず彼は人間の可能性を信じ、開発主義の立場から管理主義を避け、生徒の個性と自主性を尊重する自分の教育方針を述べ、気概のある生徒は大いに励まし、如何なる困難や逆境にも耐えうる強靱な精神と肉体をもった独立自治の人間として、将来厳しい競争世界に雄飛する準備をするよう導いてほしい。そして後輩の中で気骨のない氣力に欠ける生徒をも、治る見込みのない患者を見捨てない名医のように見捨てないでほしい、と申しています。これは新島の教育観がよく出ている手紙です。

新島は一八九〇（明治二十三年）年、近代国家に必要な国会の開設の年を記念して同志社英学校を同志社大学に昇格させる運動を続けて参りました。彼は情宣活動と募金活動で東奔西走し、一八八九（明治二十二年）年十一月、とうとう前橋で病に倒れました。冬の暖かい神奈川県大磯に避寒しながら再起をはかりましたが、病状は悪化するばかりでした。一八九〇（明治二十三年）年一月五日、彼は「石かねも通れかしと一筋に射る矢にこむる丈夫の意地」という和歌に自分の壮烈な気持を託し、大学の実現に邁進する意気込みを示しました。しかし一月十七日腹膜炎の診断を受け、二十一日に徳富蘇峰や妻八重や関係者を枕元に呼び、次のような遺言をしています。

「同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事する二係らず皆精神活力あり、真誠の自由ヲ愛し、以て邦家二尽す可き人物を養成するを務む可き事。社員たるものハ生徒を鄭重二取扱ふ可き事。同志社二於てハ剛愎不羈（テキトウフキ）なる書生ヲ圧束せず、務めて其の本性二従ひ之ヲ順導シ以テ天下の人物ヲ養成す可き事。」⑬

一月二十三日、新島は創業半ばにして天に召されました。四十六年と十一月の短い生涯でした。教育者新島襄の生涯は高い志をかがけ、それを実現するために激しい情熱を燃やし、忍耐強く、誠実に、ひたすら自分の信ずる唯一筋の道を歩み通した四十七年間でありました。彼が一八七四（明治七）年帰国して亡くなるまでの十五年間は万難を排して不可能と考えられることを可能にする戦いの連続でした。彼に想像を絶する力を発揮させたものは、彼の熱い信仰であったと思います。彼の好きな聖句に旧約聖書ヨシュア記一章九節の「強くまた雄々しくあれ、あなたがどこへ行くにもあなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」というのがあります。

教育者はいかにあるべきか

〈まとめ〉に入ります。「教育者とは如何にあるべきか」これは大変大きな問題でありますが、新島はいみじくも次のように申しています。

「一つのケースを見て、或る人についての意見を形づくるのは非常に危険である。我々は注意深くしなければならない。なぜならば、ある点について全く欠けている人も他の点で非常に有能であるかも知れないからである。いわゆる完全な人にもいくらかの欠点があるに違いない。その人の氣質や教育や周囲の人々や生活の暮し向きなどを明らかにしなさい。或る異常な場合にその人がどのような振る舞いをするか調べなさい。素早く批判しないように。さもないときと判断を誤るだろう。キリスト者の雅量（即ち大きな度量）で判断をしなさい。決してきびしすぎないように、こまかすぎないように、我々の天の父が我々を愛して下さるように、他者を愛しなさい。」⑭

新島の言葉を私共は自分のクラスの生徒や学生に当てはめてもいい、保護者や職場の同僚に当てはめて考えてもいい。彼は人間を、生徒を立体的に捉え、愛をもって包み込みなさい、と言っています。教師は生徒に知識を伝達し、学力を向上させるという教育の技術者にとどまってはならず、学習指導・生徒指導を通して生徒の心や魂を善導する人間形成という困難な役割を担っていることを自覚し、そのために日々教師自身が自らの人格を磨き、向上する努力がなされねばならないと考えます。生徒や学生はわかり易い授業をしてくれる教師を評価するでしょう。しかし彼らは教師の日々努力するひたむきな生きざまや教師の背中を見て、そこから滲み出るオーラ（aura）のようなものを感じ取り、それが生徒、学生の一生を支配するようになる場合があります。教師という職業を選んだ者は死ぬまで自己教育を宿命づけられているのです。聖職という言葉は軽々に使えませんが、物を生産したり売る労働者ではありません。数学、国語、英語、社会、体育、音楽、図工等を通して、生徒、学生の人間性を磨き、自立して厳しい社会をたくましく生き抜く人間に育てるという大きな使命をもっていることをしっかり自覚すべきではないでしょうか。私にとって以上のような新島襄が教育者としてよきモデルであると申しあげまして、私のお話を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

〈出典〉

- ①「ハーディー氏の生涯と人物」『新島襄全集』2 四一三～四一四ページ
- ②内村鑑三 鈴木俊郎訳『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波文庫 一五七～一五八ページ
- ③「宗教要論」序『全集』1 四五七～四五八ページ
- ④「基督弟子ノ足ヲ洗ヒ賜フ事」『全集』2 一〇七ページ
- ⑤藤原性郭宛書簡 明治十八年五月三十日『全集』3 三四七～三四八ページ
- ⑥新島八重宛書簡 明治十八年八月九日 同右 三五五ページ
- ⑦同志社創立十周年記念演説『全集』1 一〇七ページ
- ⑧新島八重宛書簡 明治二十二年十二月十四日『全集』4 二六七ページ
- ⑨『創設期の同志社』九九ページ
- ⑩同右 二七六ページ
- ⑪徳富蘇峰著『三代人物史』五一七～五一八ページ
- ⑫横田安止宛書簡 明治二十二年十二月三十日『全集』4 三〇六ページ
- ⑬遺言『全集』4 四〇三ページ
- ⑭Life and Letters of Joseph Hardy Neesima, pp.263-4.